小笠原諸島を襲った５個の新検出津波史料

Newly Discovered records of Five Historical Tsunamis of Bonin Archipelago

都司 嘉宣[1]
Yoshinobu Tsuji[1]

[1] 東大地震研
[1] ERI, Univ. Tokyo

［はじめに］

小笠原諸島は、1593 年に発見された後、定住者のないまま約 230 年の時が流れた。1826 年に英国の捕鯨船ウイリアム号が父島に停泊し、暴風によって船が破壊した。数ヶ月後に修理が完成して帰国したが、このとき船員２名を島に残留させた。最初に定住を始めたのは欧米系の住民で 1830 年のことであった。その後、江戸幕府による文久元年(1861)の幕吏派遣と日本人定住者の植民の試みも幕末の混乱のためにわずか２年余で挫折した。日本系住民の本格的な定住の開始と領有宣言とその国際的な承認とは、ようやく 1876 年（明治九年）のことであった。第二次世界大戦末期の昭和 19 年(1944)には、住民全体の本土への強制疎開が行われ、島には軍関係者しか残らなかった。昭和 20 年(1945)の終戦ののち、小笠原諸島は米軍に占領されその統治下におかれた。昭和２１年(1946)にまず欧米系住民が帰島を許され、昭和 43 年(1968)年に日本に返還されて以後、日本人旧島民の帰島が実現して今日に至っている。

羽鳥（1985）は、安政東海地震(1854)と明治三陸津波(1896)の津波の父島のようすや、大正７年(1918)の千島ウルップ島地震と昭和８年(1933)昭和三陸津波の父島での検潮記録を紹介したのを始め、父島で記録された 10 件の津波が表として載せられている。今回、筆者は東京都の「小笠原諸島津波浸水予測調査」の一環として父島・母島を訪れる機会を得て、羽鳥論文にはふれられていない５個の津波についての知識を得た。その５個とは、文政８年 12 月（1826 年１月）の近地津波、明治５年（1872)、昭和 19 年(1944)東南海地震、昭和 21 年(1946)南海地震、さらに昭和 35 年（1960）のチリ津波であって、すべて日本系住民のいない時期に起きた津波事例である。

［1826 年１月（文政８年 12 月）の近地地震津波］

1827 年に父島を訪れ、前年から島に残留していた２人の船員の話を聞いた英国軍艦 Blossom 号の Beechy 艦長の記録にこの津波の記載が現れる。「父島で津波を伴ったたいへん強い地震があった。この島に残された２人の船員の証言によると、二見港では、満潮時の最高水位の上方２０フィート（６m）まで海水が揚がった。この湾で建造された帆船は破船した。この港で以前から座礁していた船から積み荷が流出し、湾内を漂いはじめ、海岸に流れ着いた。数個の樽が通常の平均水位より 12 フィート（3.5m）の高さにとどまっていた。恐れた船乗りたちは丘に逃げた」。これによると、大地震を感じた後に津波が来て、海水が満潮水位より６m上まで上昇した。帆船１隻が破船し。以前から座礁していた船の積荷が流出をはじめ、浜辺の標高 3.5mの高さに樽が漂着した、となろう。

［1872 年（明治５年）秋の近地地震津波］

欧米系住民の１人であるナサニエル・セボレーの記録によると「1872 年の秋のことだった。日曜日の深夜近く、強い地震に引き続いて起きた。地震のとき海面は静かだった。人々は地震の揺れによる心の動揺から立ち直ると、再び横になって寝入りはじめた。そのとき、彼らは海水が浜と居住地域の間にある林のなかを急な速度で進行しているのに気付いた。波は大小様々に六回か七回来た。中間の波が一番大きかった。住民は居住地域の背後の急な斜面をよじ登りはじめた。１つの波が来てから次の波が来るまでの間に、ありったけの荷物を持ち出そうとした。書類は船員トランクに入れておいた分はもって逃げることができた。しかし、分厚い日記と、机の上に置いてあった書類は残念ながら全部流されてしまった。」とある。この津波について、父島清瀬の池田実氏は祖父チャーレの話として、「昔住んでいた場所は、現在のＮＴＴ宿舎（奥村）あたりだったが、そこで明治五年以来３回チリ津波程度のでかいやつにやられたことがあった」とつたえられている。

［昭和 19 年東南海地震津波］

小笠原父島在住の辻友衛が作成した「小笠原諸島歴史日記・上」に「父島・母島でも弱い地震と津波あり。この津波で、特殊潜航艇甲標的一隻が二見湾海岸に打ち上げられる。震洋隊でも数隻破損す。最高潮位３メートル」の記載がある。

［昭和 21 年南海地震津波］

小笠原高校の教諭であった鈴木高弘(1992)の「米軍支配下の小笠原諸島のチリ地震津波」に「父島で床下浸水」と記されている。

［昭和 35 年（1960）チリ津波］

欧米系旧島民のみが帰島を許された時期に起きたチリ津波に関しては、都立小笠原高等学校の鈴木(1992)による、欧米系住民２６人に対する聞き取り証言調査がある。米軍統治下の小笠原という、日本側の研究調査の行われなかった特殊な事情のもとに起きた災害事例の調査としてたいへん貴重なものである。